

# 『ベルナウ時間草稿（一九一七・一八）』の解読

——意識流と自我作用の出来事としての現在への反省とその問題点——

和田 渡

## I 序論

フッサールの時間意識の現象学における根本問題のひとつは、感覚、知覚、想起、想像といった多様な志向的働きが未来や過去との密接な連関を伴う出来事(Ereignis, Vorkommnis)として生起する場としての現在を、注意深い反省の視線のもとで記述することであった。現在の経験に反省の眼差しを注ぐとき、直ちに気づかれるのはヒュレー的なものを背景にして出現する特定のノエマ的対象であり、すでに過去化してもはや現に目の前には存在しないものの過去からの想起的な出現であり、想像作用と相關的な想像的対象の出現であり、それらが次から次へと間断なく移行する出来事である。この出来事は、過去のなもの、現在のなもの、未来的なものが相互に錯綜しつつ展開するものであり、その過程で、ある対象が現われ、別の対象の現われへと転換し、それは絶え間なく生起している。そうした転換は私の注意に応じて生じる場合もあれば、私の姿勢とは無関係に起こる場合もあるが、いず

れにせよ、現在の出来事は中断することなく続いているのである。そうした過程を対象化する思索は、初期の内的時間意識の現象学講義においても、後期の「生き生きとした現在」を主題化した、いわゆるC草稿においても明らかに認められるが、現に起きている出来事を執拗に反省の俎上にのせて検討する側面が際立つのは中期のベルナウ草稿である。そうした反省の努力が、一九二〇年代に豊かな展開を見せる発生的現象学の端緒となつていことは疑いえない。そこで本稿においては、フッサールが現在において生起する出来事をどのように記述しているかを、ベルナウ草稿の特に第十一テキスト「原現示における内容と統握、把持と予持」を中心にして検討し、その特色と意義を考察してみたい。

## II 原現在意識の出来事とその変様過程

周知のように、ベルナウ草稿においては、「原」という接頭辞が頻出する。原現示、原予持、原把持、原プロセス、原湧出、原

知覚、原体験、など列挙すれば足りないほどである。なぜその接頭辞が多用されるのであろうか。あるいは、それが指し示す事態とはいかなるものであろうか。その理由をさぐるためには、この草稿がフッサールによって日々繰り返される反省と不可分な点を特に考慮すべきである。反省は日々新たに開始され、そのつど反省される事象は異なる。反省作用の時間位置が異なり、反省される事象もそのつど変わるため、どの反省もただ一度かぎりのものである。反省される事象は反省の視線の下にただ一度現れて、変換するのであり、同じ事象が二度現れることはない。「原」という接頭辞は、そうした多様な事象が、現に、今この時点で反省のまなざしの下にあることを示すために用いられている。したがって、原現示とは、何物かが現に、今、ここでありありと(leihhaftig)意識に現れている場面を示すのであり、原予持とは予持の働きが現になされている場面を示すのである。端的に言えば、「原」という接頭辞は、いかなる作用であれ、それがただ一度限りの出来事として生起する場面を示すために付け加えられている。言い換えれば、フッサールの視線によって、現に、しかと注目されているそのつどの位相、「原」に係わるのである。この点に注目すれば、ベルナウ草稿は、刻々と姿を変える出来事を注視しながら、日々更新される反省の記録である。それは次第に深化し、より繊細になる内省的記述でもある。

こうした「原」との関連において、第十一テキストの第一節「時間意識の諸々の根本事象」で問題となるのが原現在意識であ

る。その事象のひとつは、「たとえば何物かが原現在のに、今存在することとして意識されることになる際の原現在意識のようなものがある<sup>(1)</sup>」ということであり、もうひとつは、「原現在意識が過去意識の連続へと転化し、この連続の内と同じ内容が連続的に変換する形式において意識されている<sup>(2)</sup>」ということである。前者はフッサール現象学における根本問題である知覚と係わるが、このテキストで特に問題となるのは、現に反省の視線の下にある出来事としての原現在意識において、「原現在のなもの(das Urgegenwärtige)」が過去へと移行(Übergang)する過程であり、過去化したものがさらに遠い過去へと転化、変換していく過程である。過去化した現在とは「二次的な現在(die sekundäre Gegenwart)」<sup>(3)</sup>とも呼ばれるが、それが近い過去から、より遠い過去へと沈下していく過程が反省において意識されるのである。この過程は、原現在を基点として過去へと転化、変換するものであるが、能動的な意識の働きによる産出過程ではなく、むしろ、それ自身でおのずと(von selbst)生ずる、言わば意識の自然的な過程である。フッサールによれば、それは持続的な流動、「流れの持続体(ein Kontinuum des Flusses)」<sup>(4)</sup>(他ならないが、その流れは流れ自身の自発的な働きによって可能になる。われわれはこの流れの速度を速めたり、遅くしたりはできないのである。この流れについては、すでに『内的時間意識の現象学』のなかでも次のように述べられている。「この(流れ)の変化は現に経過しているとおりに経過し、もつと速く経過したり、もつと遅く経過し

たりすることはありえないという不合理を伴っている」<sup>(5)</sup>。何かを想い出す働きや、想像する働きは、それらを開始したり、中断して再開したりすることができ、われわれの自由に属するが、意識の流れはそれ自身がその速度を決定するがゆえに、われわれはこの流れに従う他はないのである。「不合理」という言い方の背後には、自由を許さない流れの強制力に対するフッサールの一種の抵抗の気持が隠されていると言えるであろう。

原現在意識において生起するのは、過去への転化、変様の出来事だけでは無縁ない。フッサールによれば、原現在意識においては、現在から過去への変様とひとつになって、「常に新しい意識（ein immer neues Bewusstsein）」が湧出してゐる（entquellen）。例えば知覚の例で言えば、あらたな知覚の始まる時点では、既になされた知覚は過去変様化的湧出の過程にあるということである。こうしたふたつの湧出に関する記述を検討してみよう。「両方の湧出、つまり原現在性が湧き上がる絶えざる湧出と、過去が湧き上がる湧出は、持続的であらたな原現在のものの意識（もしくは分離した、新たな原出来事の意識）が、あらゆる位相の沈下と過去への広がりによつてのみ可能であるという仕方で、不可分な形でひとつ（untrennbar eins）になつてゐる」<sup>(7)</sup>。「ひとつになる」あるいは「……とひとつになつて in eins mit」というフッサールが多用する言い方は、意識の流れを特徴づけている。すなわち、意識の流れにおいて生起するあらゆる現象は、並置や混在という形ではなく、一体化もしくは統一という形をとるのであ

る。<sup>(8)</sup>の様態は、「融解（Verschmelzung）／溶け合う（verschmelzen）」という表現によつても示されている。「原現在というあらゆる位相と、同じ出来事の意識の統一に属する諸々の過去としての過去の現在は融合している」<sup>(8)</sup>。「融合」という概念は、「相互浸透（Ineinander）」という概念と同様に、意識現象が相互に溶け合つてひとつになる「生成（Werden）」の過程を指示している。この過程を可能にするのは意識作用の極としての自我ではなく、自我作用の現在への出現と現在からの後退の場所である意識流の自己構成的な働きである。知覚するのは自我であるが、ひとたび遂行された知覚作用は、次々と過去化して変様しながら沈澱することをやめない。その場合に、沈澱する作用は、先に述べたように、他の作用と融合しながら沈澱していくのであり、その過程に自我が介入することはできない。現在の生成的な出来事においては、自我の自由を超えるような融合現象が不断におのずと生起しているのである。それは、先に述べた言い方をすれば、意識の自然的なプロセスであり、そうした意識がそれ自身で自らの流れを構成する側面を一念に記述する点にベルナウ草稿の注目すべき特徴が現れている。こうした流れの出来事と自我の関係について、さらに章を改めて検討してみたい。

### Ⅲ 意識の多様な流れ（流れ去ること）として の自然的な出来事と自我—フッサールとメルロ

#### Ⅱ ポンティ—

Ⅰで述べたように、フッサールの反省の視線の向かう先には、常に生き生きと流れる現在があり、その流れは、間断なくそれ自身で流れ続けているのであり、自我がその流れを中断させたり、再度流れさせたりすることはできない。意識の自己構成的な流れに支えられてこそ、自我の作用も初めて可能になるのであり、その意味で、生き生きと流れる現在こそが「先行的次元」と考えられるべきものである。フッサールの功績は、現在の出来事についての反省を繰り返すなかで、自我の働きに先行する根源的な流れの次元を明らかにしている点にある。

意識の流れと自我の関係について、フッサールに近い見解をとるのがメルロ・ポンティである。『知覚の現象学』のなかの「時間性」の章を見てみよう。「意識とは時間化の運動そのものである、フッサールの言う〈流動〉であり、自分を先取りし、自分から離れることのない流れなのである」<sup>⑨</sup>。メルロ・ポンティが注目しているのは、意識の流れの自発性であり、流れが自己の在り様を規定するという側面である。別の箇所では、彼は次のようにも述べて、同じ観点を強調している。「時間は私があるうとしているものを私から引き離しもあるが、それと同時に、距離をおいて私を捉えたり、私を私として実現したりする手段をも私にあたえ

てくれる」<sup>⑩</sup>。この引用箇所での「時間」は「意識の流れ」と読み替えることも可能であり、ここでも時間Ⅱ意識の流れの自発性が強調されていると見てよいであろう。意識がまず自ら流れることによつて現在から過去にいたる流れの「時間」がつくられ、それに基づいて自我の作用の場が用意されるのであり、その逆ではないということである。そうした流れの自発性を主張する視点がもつとも明瞭に示されているのが次の箇所である。「われわれが自発的であり、意識としてのわれわれが己れを己れ自身から引き離すからわれわれが時間的なのではなく、逆に時間こそがわれわれの自発性の基礎であり尺度なのであつて、われわれに住みつき、われわれ自身がそれであるところの、超え出て行き（無化する）能力も、それ自体は時間性や生とともにわれわれにあたえられているのだ」<sup>⑪</sup>。ここでも、「時間」を「意識の流れ」、「時間性」を「意識の流動性」と読み替えれば、強調されているのは自我に先駆けて流れ、流れ続けることを通じて自我に活動の可能性を与える流れの根源的自発性であると言つてよいだろう。こうした観点は、『知覚の現象学』にとどまらず、「研究ノート」にも、見出されるものである。「フッサールは、私が時間を構成するのではなく時間が自己を構成するのであり、時間は自己現出 (Selbst-erscheinung) だと言っているが、これは正しい」<sup>⑫</sup>。この箇所についても、「時間」を「意識の流れ」と読み替えることが可能だとすれば、メルロ・ポンティがフッサールと共に注目しているのは、流れが自分で自らの流れをつくりだしている場面であり、流

れが自分で姿を現す場面である。こうした時間の自己現出（意識の流れの自己構成）こそが、生き生きした現在の出来事を可能にするものである。自我の覚醒、睡眠にかかわらず、不断に流れ続けるこの流れのなかで、そのつどの自我の働きも生じる。自我の働きには停止や中断、再開といったことが頻繁に起こるが、意識の流れにはいささかの中断もないのである。フッサールによれば、この流れは「プロセスという原事実 (die Uratsache des Prozesses)<sup>(13)</sup>」であり、このプロセスは自らを自ら自身に対してプロセスとして構成している。すなわち、このプロセスは、自我の発意によって生起するものでもなく、外部からの力によって生起するものでもなく、それ自身がそれ自身のうちで自己を構成するという自己完結的な特徴を備えている。この位相を時間化の過程と見るならば、時間化の主導権を握っているのは自我ではなく、意識の根源的な流れなのである。

そうした流れの自己構成的なプロセスが生起しているがゆえに、そのなかで自我の作用も可能になる。しかし、一度遂行された作用は流れのなかで次第に現在から後退していくのを免れえない。この後退する過程は、意識の流れにおいておのずと生起する出来事であり、先に述べたように、自我は、自らの作用が過去へと後退し、沈下するのを引き止めることはできないのである。フッサールは、第十一テキストでは、この位相を「把持的変様」と名づけて、それを、現在における作用の勢いが次第に色あせていく過程、把持されているものが次第に生気を失い、生気が零点

にまで行き着く過程とみなしてもいい。「（意識の）内容は常により弱々しいものになり、最終的には消失してしまう<sup>(14)</sup>」。この過程は、フッサールがたびたび反省の例として持ち出す音の知覚で言えば、音の「原響き (Urklang)」が「残響 (Nachklang)」を経て、「微弱化する音 (Abklang)」そして「音の消失」へと至る過程である。具体的に言えば、今耳に鳴り響いている音は、しばらくの間耳に残っていても、次々と別の音が聞こえてくるにつれて、次第に聞こえなくなっていく。今における新鮮な音の響きは、次に新鮮に響く音にとって代わられ、いわば古い音へと次第に退き、刻々と出現する音によって近い過去から遠い過去へと追いやられていくのである。したがって、生き生きした現在の出来事とは、「新たな音の響き (Neuanfangen)<sup>(15)</sup>」と「音の微弱化 (Abklängen)<sup>(16)</sup>」が同時に生起する事態と言つてよい。ただし、前者は意識流の自己構成の、常に新たに展開する現在の位相において生起する事態であり、後者は現在が進行するなかで過去へと向かう位相において生起する事態に他ならない。フッサールは、この両者の一方を予持と予持の充実化の流れとみなし、他方を把持と把持の脱充実化の流れとみなしている。前者は今から未来へと向かう流れのなかで生起し、後者は今から過去への流れのなかで生起するものである。前者においては、次々に新たなものが意識に与えられたり、あらかじめ予期されていたものがそのとおりに、あるいは予想に反するものとして意識に与えられたりする。後者においては、今意識に与えられたものが、その充実度を次第に失い、過去

へと沈下していく。そして、最終的には「明るさの零点 (Nullpunkt der Klarheit)<sup>(17)</sup>」に至る。しかし、言うまでも無いが、この二つの流れは相互に分離されうるものではない。先にも述べたように、未来へ向かう流れと過去へ向かう流れは、生き生きとした現在における知覚とその把持的変様の過程に注目すれば二方向に分けられても、実際には両者は相互に浸透し合って渾然一体となつて進行するものである。それゆえに、未来に向かうなかで現在に到来し、次第に過去化する流れと、そこにおいて生起する変様の出来事は、一方的に過去に向かうだけでなく、未来に向かう流れと相互に浸透し合うがゆえに、その流れに内側から働きかけることをやめないのである。過去に向かう流れは、沈下、変様しつつも、他方では浮上して、新たな現在の出来事に影響を及ぼし続けるのである。とは言え、過去化した流れがどのようにしてさらに遠い過去へと沈下していくかはわからないし、そうした過去方向の流れがどのようにして現在に影響するのかは不明である。二つの流れがどのように浸透し合うのかも定かではない。それと言うのも、流れの浸透という現象は直接的に反省の意識に与えられることはないからである。われわれが確認できるのは、先に述べたように、この流れがそれ自身で自らを構成する流れであり、自我の恣意的な構成を許さないということである。

この流れは、「根源的に持続する過程 (eine ursprünglich kontinuierliche Folge)<sup>(18)</sup>」「原プロセス (Urprozess)<sup>(19)</sup>」「根源的な時間構成的プロセス<sup>(20)</sup>」「根源的な生の流れ<sup>(21)</sup>」などとも呼ばれてい

るが、すでに述べたように、二つの流れによって形成される出来事である。フッサールは、その位相を「両面的な無限の線の連続体 (ein zweiseitig unendliches Linearkontinuum)<sup>(22)</sup>」とも名づけているが、いずれの名前で呼ぶにせよ、この流れには自我の推量を超えた「力」が働いていると見るべきであろう。未来と過去の両方向へと無限に伸び広がる流れを自らでつくりだし、昼夜を分かたず流れ続けるこの流れは、そこにおいて生起する意識の出来事をおのれのうちに受容しながら流れ、その流れのなかでその出来事を自我の知りえない仕方、でいわば消化、吸収しながら、そのようにして吸収したものを現在に送り返すことを止めないのである。そうした過去化したものの現在への影響を通じて、流れは自分を更新させることを止めない。それゆえに、意識の流れは、まさしくフッサールの言うように「生成」であり、単なる持続の過程ではない。「生成」とは、質的な変様を伴いながら不断に自己を作りかえる生の歴史でもある。意識の流れは、川岸に経って眺める川の流れのように、流れ来て、流れ行くだけではなく、流れ来るものと流れ去るものの相互的な影響を受けつつ、生き生きと「成長する」出来事なのである。ここで言う成長は、自我の成長ではなく、流れの自己成長を意味するものである。こうした側面を反省して、フッサールは形式的には次のようにも述べている。「超越論的原生命は原意識の流動であり、永遠の（静止することのない）来ることと去ることであり、その場合に（去ること）はやって来たものの自己変様である Das transzendente Urleben

ist ein Strom von Urbewusstsein, ein ewiges (unaufhörliches) Entstehen und Vergehen, wobei das „Vergehen, ein Sich-Modifizieren des Entstanden ist.“<sup>(22)</sup>。たしかに、生命の出来事は、フッサールの言うように、今、意識が生きて流れることであり、そこにおけるさまざまなもの（ヒュレー、ノエシシスとノエマの相関現象、感情など）の去来であり、現在に到来したものがそれ自身で変換し、沈下していくことである。内的生成の過程の始まりと終わりを注視できない以上、流れの永遠性を強調するフッサールに同意することはできないが、意識の流れが生成の出来事であることは疑い得ない。しかし、生成という出来事をさらに詳しく検討するために、流れの自己成長という側面に注目するだけでなく、自我の活動と流れの交錯する位相を視野に入れなければならない。その点について、章を改めて検討してみたい。

#### Ⅳ 自我の自己実現と自己生成する流れ

##### （流れ来ること）の相互交錯という出来事

意識の流れを右に述べたような、比類ない特徴をもった出来事として捉え、それと自我との関係を考える場合には、未来へ向かう流れの中で、未来から自我の現在に到来したものが、現在を経て過去へ沈下する変換の自然的な過程として捉えるだけでは十分ではない。自我の活動を支える流れに、ある種のダイナミズム、すなわち、自己を変換し、組み替えていく働きを見ようとすれば、流れの自然的なリズムとは異なる現象に注目しなければなら

ないのである。すでに述べた、沈下、変換の過程は、絶え間なく、おのずと起こるものであり、自我の働きが中断している睡眠時であっても、感覚のレベルではその過程が継続している。感覚的な刺激によって、眠った状態にある自我が反応することからも明らかのように、意識の流れはいかなる場合にも自然に何かを受容し続けているのである。しかし、そうした自然的な過程の継続のみが意識の流れであるとすれば、そこに自我の自己実現という意味での生成の出来事を認めることは困難であろう。

意識の流れを自然な過程としてではなく、ダイナミックで、自己改変的な自我の現在の流れの過程として注目する場合に、フッサールが用いる概念のひとつが「潜在性 (Potentialität)」である。潜在するということは、自我の現在の出来事が、把持的変換を経た次第に過去へ沈没していく過程で、完全に忘却の淵に沈んでしまうのではなく、新たな自我の現在の出来事において顕在化する可能性を意味している。現在において自我によって生きられた出来事は、「潜在性の状態」と (in den Status der Potentialität)<sup>(23)</sup> 沈下するが、やがてまた浮上して新たな現在の出来事の生成に加わるのである。ここで特に注意しなければならないが、この場合に加わる働きは、現在から後退して不断に流れ去る意識の流れのなかで、新たな現在に流れ来るものである。この内側から流れ来るものの働きかけを通じて、自我はそのつど新たに自己を実現していくことができる。もしもこうした内側から働きかけるものがないとすれば、自我は単調な反復活動に終始するかもしれないが、自

我にはそれを許さない「力」が及んでいるのである。それゆえに、あらゆる自我の活動は、それに先行する出来事の潜在化し、再び顕在化する働きを受けながら、常に更新され続けるのである。この過程を端的に示すのが次の文章である。「具体的知覚は、根源的な作用の持続的な継続を超えて広がり、あらゆる位相の獲得物を、言わば絶えず養い育てる意識の統一である」<sup>25</sup>。すなわち、知覚の例で言えば、現在における自我の知覚経験は、後続する知覚経験に養分を与えて、それを成長させるということである。両者の経験の時間位置が異なり、知覚内容にそのつど違いがあつても、両者は相互に切り離され、分断されたままにとどまるのではなく、「潜在から顕在へ」という沈下する流れのなかで浮上する流れに促されつつ、自我は新たな自己を実現するのである。こうした不可思議とも言うべき流れがあるがゆえに、自我のあらゆる出来事は単調で機械的な反復を免れ、日々更新されるダイナミックスな経験となるのである。この経験は、相互に外在的なもの同士がその距離を保ちながら関係するのとは異なる。この経験は、ここにおいて生起するもの同士が相互に相手の中へ入り込みつつ、相手と一体化しながら展開する、きわめて有機的な特徴をもつと言つてよいだろう。この経験は、言わば、過去と現在の不断の共鳴に支えられて、統一的でまとまりをもった出来事として生成するのであり、その意味でこの出来事は、フッサールの好む言い方をすれば、「生き生きとした」過程なのであり、その過程の軸となるのが自我である。この過程においては、自我の経験のすべて

は、先行するものの後続するものへの影響関係の下で、そのつど新しい装いを見せることをやめない。たとえばある絵画を二度目に見る経験には、一度目にそれを見た経験がなんらかの仕方で影響を及ぼすことによつて絵画の味方が違ってくるし、同じ事柄を繰り返して考える場合にも、考えたことが考えることに影響し、考える内容に次第に変化が現れてくる。しかしそればかりでなく、生き生きした過程が過去と現在の有機的な結びつきをもつ流れであるということは、現に生起するものが過去へと影響するということでもある。すなわち、自我の現在の経験は、それに先行する経験との共鳴の出来事として生起するだけではない。自我が現に行う経験はそれに後続する経験との間でも共鳴し、過去化した経験の全体をなんらかの仕方に変えるのである。とは言え、自我はその変化がどのようなものになるかを予測することはできない。自我の活動は、「なんらかの仕方です」としか言う以外のない過去と現在の間での共鳴の出来事に支えられながら日々新たなものとして展開するだけなのである。過去から現在に流れ来るものがどのように影響するかも、現在が過去へどのように影響するかも不明なのである。

このようにして、自我の活動には、自我には知られることのない流れが伴うということを確認すれば、自我の自己認識の限界が明らかになる。とは言え、この問題はフッサールのものではない。フッサール自身は、反省の眼差しを意識流の出来事や、自我の働きの諸相に向けて、そこに現れる事象を際限なく記述し続け

たのであり、自我の自己認識とその限界という問題設定はしなかった。それゆえに、この問題を考察するためには、フッサールに逆らって考える必要があるので、稿を改めなければならない。

## V 結論

以上、意識流と自我の作用の出来事に関するフッサールの反省と、そこに現れる問題を、特に『ベルナウ草稿』の第十一テクストを中心に考察した。両者の出来事に対するフッサールの徹底的な反省によって記述されているのは、IIで述べたように、現に生起している出来事が意識の自己構成的な過程でどのように出現し、変換し、経過する位相であり、IIIで述べたように、自我に先行する意識流の自己構成的過程の諸相である。さらにまた。IVで述べたように、フッサールの視線は、意識流の自己構成的側面と自我の作用が絡み合う位相にも向けられている。そうした反省の努力が、意識と自我の出来事の諸相を比類なく繊細な記述にもたらしている点にこそ、『ベルナウ草稿』の画期的な意義が認められるのである。

## 注

- (1) *Husserliana* Bd. XXXIII, S.210.
- (2) *Ibid.*, S.210.
- (3) *Ibid.*, S.210.
- (4) *Ibid.*, S.210.

- (5) *Husserliana* Bd.X, S.74
- (6) *Husserliana* Bd.XXXIII, S.211.
- (7) *Ibid.*, S.211.
- (8) *Ibid.*, S.211.
- (9) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Éditions Gallimard 1945, p.485f.
- (10) *Ibid.*, p.488.
- (11) *Ibid.*, p.489.
- (12) M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Éditions Gallimard 1964, p.244.
- (13) *Husserliana* Bd.XXXIII, S.212.
- (14) *Ibid.*, S.213.
- (15) *Ibid.*, S.219.
- (16) *Ibid.*, S.219.
- (17) *Ibid.*, S.227.
- (18) *Ibid.*, S.222.
- (19) *Ibid.*, S.222.
- (20) *Ibid.*, S.223.
- (21) *Ibid.*, S.239.
- (22) *Ibid.*, S.239.
- (23) *Ibid.*, S.267.
- (24) *Ibid.*, S.233.
- (25) *Ibid.*, S.178.

(二〇〇三年十一月四日受付)

(二〇〇三年十二月十九日掲載決定)